目 次 大 綱

編目		章目		節目		各節目で想定する主な項目	西暦
序文							
市民憲章							
口絵							
目次							
凡例							
執筆担当者一覧							
序編	苫小牧市の概要	第1章	位置と面積、地形・地質・気候				
		第2章	植物、動物、自然環境、人口				
		第3章	地名解				
		第4章	産業、名産、名所、イベント・まつり				
第1編	先史時代	第1章	苫小牧及び苫東遺跡一覧	第1節	苫小牧市内の遺跡		
				第2節	苫小牧東部大規模工業基地開発建設に伴う埋蔵文化財調査	苫小牧	
						厚真・安平・早来	
		第2章	旧石器時代	第1節	旧石器時代	石器捏造事件よる社会的影響 （考古学の後退、19年前へ）	
						苫小牧美沢1遺跡 （1万8千年前の石器）	
						静川5遺跡 （彫器と細石刃核 1万2千年前の石器）	
						静川14遺跡 （荒屋型彫器）	
						苫東・早来町遠浅6遺跡	
		第3章	縄文時代	第1節	縄文早期	有珠川2、美沢1、美沢東6、静川22（苫小牧最古貝殻文尖底土器・石刃族）	
						静川5、静川14遺跡	
						静川8遺跡（早期後半～前期に集落を形成（35軒の竪穴住居））	
						ニナルカ遺跡（縄文早期の貝塚）、その他	
				第2節	縄文前期	静川22、植苗貝塚、柳館貝塚、美沢4、御前水、柏原14（市内6か所の貝塚）	
						柏原17、静川8遺跡、その他	
				第3節	縄文中期	静川遺跡（国指定史跡・環濠）	
						美沢東6、静川9・14・25・37、柏原18遺跡、その他	
				第4節	縄文後期	柏原5	
						美沢1遺跡(周堤墓6基)	
				第5節	縄文晩期	美沢3・美沢東16	
						柏原4・5・16・18遺跡（樽前c火山灰の上下からタンネトウL式土器）	
		第4章	続縄文時代	第1節	続縄文時代	タプコプ遺跡、静川22遺跡、ニナルカ遺跡その他	
		第5章	擦文時代	第1節	擦文時代	タプコプ遺跡、静川22遺跡、ニナルカ遺跡、柏原18遺跡その他	
第2編	中～近世	第1章	中世のアイヌ民族と和人の侵入	第1節	文献資料への登場から夷島まで	文献資料への登場から夷島まで	
						和人社会の成立とコシャマインの戦い	1457
		第2章	松前藩と蝦夷地	第1節	松前藩と蝦夷地	家康の黒印状と松前藩	
						シャクシャインの戦い	1669
				第2節	場所の成立	商場から場所へ	
		第3章	近世におけるユウフツ	第1節	アイヌ文化とユウフツ	ユウフツにおけるアイヌ民族の生活と文化	
						埋蔵文化財発掘調査におけるアイヌ文化期の遺物、遺跡	
						交通の要衝として～沼ノ端・柏原の丸木舟	
						物流の整備 勇払越え-美々越え(千歳市美々8遺跡発掘調査からより鮮明に）	
						弁天貝塚からみるアイヌのくらしと交流（南北戦争時米軍将校の金ボタン、オランダ製ビール瓶など）	
				第2節	松前藩とユウフツ	場所請負制とシコツ一六場所	
				第3節	第一次幕領期	クナシリメナシの戦い	1789
						幕府の蝦夷地政策	
						異国船の来航と幕府の蝦夷地直轄	
						八王子千人同心と蝦夷地	
						奉納物から見る和人のくらし タルマエ・ユウフツの堂社	
				第4節	松前藩復領期	場所請負人山田文右衛門	
						イワシ漁と出稼ぎ漁民・アイヌの漁労	
				第5節	第二次幕領期から幕末にかけて	勇払会所の機構と変遷	
第3編	近～現代	第1章	明治の国づくり 明治時代 前・中期 1869-1903	第1節	開拓使の時代	北海道の命名と国郡の区画（明治2年）	1869
						高知藩の分領支配（明治3から5年）	1870-1872
						開拓使出張所設置（明治5年）	1872
						北海道開拓使による整備(お雇い外国人の活躍)	1872
						三角測量基線 （ワッソン、デイ、福士成豊、荒井郁之助）（明治6年）	1873
						道路網整備における要衝(札幌本道の建設・室蘭-苫細-千歳島松間開通)	1872
						勇払郡開拓使出張所の移設（苫細へ）（苫小牧開基記念日の根拠）	1873
						駅逓と苫小牧 （植田甚蔵）	1873
						苫細から苫小牧に（苫小牧村の誕生）	1874
						美々鹿肉缶詰製造所 （官営工業の始動と廃止）	1878-1884
						郡役所と戸長役場 （総代人の設置）	1880
						明治天皇行幸	1881
				第2節	道庁の時代	「三県一局」時代から「北海道庁」時代へ（明治15～19年）	1882-1886
						苫小牧村45番地に電信分局を設置	1884
						郡役所に警察機能 登記所開設	1886-1887
				第3節	戸長役場から村へ	苫小牧外十五カ村戸長役場 （初代戸（村）長 原直次郎）（明治22年）	1889
						御料局札幌支庁苫小牧分担区を設置	1890
						鵡川・厚真・安平の分村	1895
						苫小牧村 二級町村制を実施 （初代村長 山崎初吉）（明治35年）	1902
						苫小牧村 第一回村会議員選挙実施	1902
				第4節	主たる産業（漁業）	漁場の経営 （漁場持ち制度廃止）	
						勇払アイヌと漁業	
						イワシの千石場所(明治21年)	1888
						漁業組合創立 （植田惣吉）	1888
						漁業法制定 （漁業権）	1902
				第5節	原野の開墾（農業）	バッタの被害（蝗害こうがい）	1880-1883
						開墾者の入植	1892
						牛馬の生産と飼育 （広大な土地と放牧に適した環境 早来）	
						馬市の発展	1887
				第6節	木材資源と産業	薪炭・鉄道枕木の生産	
						マッチ産業 （小規模工業の台頭と衰退）（木材資源）	1891
				第7節	物流の中継地として	北海道炭鉱鉄道設立（室蘭線開通、苫小牧駅開業）	1889-1892
						空知の石炭を室蘭へ	

目 次 大 綱

編目		章目		節目		各節目で想定する主な項目	西暦
						産業の停滞・安平の成長	
						運送業の成立 （小保方卯市）（明治33年）	1900
				第8節	次世代のために 教育の振興・普及	仮教育所を駅逓内に開設（明治9年）その後村役場へ移設（11年）	1876-1878
						苫小牧教育所校舎落成。（明治12年）	1879
						苫小牧教育所改め公立苫小牧学校へ（明治14年）	1881
						覚生分校・勇払分校・植苗簡易教育所などの設置	1890－1903
						農学校演習林を設ける	1904
				第9節	人々の暮らしと信仰	恵比須（蛭子）神社の建立 （嘉永3年）	1850
						樽前山神社の建立（明治7年）	1874
						中央院の開山（明治12年）など	1879
						井上千代と出雲神社 （井上来苫、中村組により建立）（明治44年）	1906-1911
						私設消防組の創設（明治27年）	1894
						苫小牧村の大火（明治30年、32年）	1897-1899
						遊郭免許おりる（明治33年）	1900
						新川の造成 （明治21年）	1888
		第2章	近代工業の始動 明治時代後期 1904-1912	第1節	王子製紙進出・建設	王子製紙専務鈴木梅四郎一行の支笏湖周辺調査(明治37年)	1904
						村民代表、王子へ工場誘致(明治39年)	1906
						王子製紙千歳川水利権を取得(明治39年)	1906
						山線・王子軽便鉄道施設工事と発電所建設(明治40年)	1907
						工場建設と物流の整備（山線運行開始）(明治41年)	1908
				第2節	苫小牧工場操業	水力発電・木材資源・交通の利便性・広大な土地払い下げ・砂利ひろい	1910
						廃液問題の発生 （新興産業と旧産業との軋轢）漁業補償	1910
						経営不振に	
						市街地の電灯事業	1911
						北海カーバイト工場・末次商会(王子関連工場の始動と廃止)	1912
				第3節	工場稼動の波及	牛馬の生産と飼育	
						鉄道網の発達 （浜線ほか）	1911
						商業施設の増加 （角屋呉服）	1911
		第3章	紙の町誕生 大正 1912-1926	第1節	企業城下町の形成	日本を代表することになる経営者（藤原銀次郎・足立正ら）	1912
						本社直結の経営 （学卒社員エリートたち）	
						工場に残る身分制 （倶楽部・社宅等の整備）	
						王子病院設置	1912
						王子娯楽場(大正4年)	1915
						第一洋食店 （文化サロンとしての位置づけ 料亭の誕生）	1919
						王子選出の議員たち	
				第2節	富裕層の誕生	小保方卯市 （苫小牧工場建設資材運送指定人）	
						中村捨次郎 （土木建築の下請。廃液問題から漁業経営 王子社員向け購買部）	
						町の有力者たち（漁業・運送・土木・商業など）	
				第3節	工場を支える人たち	山子と流送人（内地出稼人による請負） （よいとまけ 王子と物流）	
						女性の職工と仕上げ作業（砂田シゲほか）	
						馬匹台帳から（ばん馬能力共進会）	1925
				第4節	民衆文化の萌芽	村営電気事業の開始(大正2年)	1913
						娯楽施設の充実、（大和座（後の喜楽座）、旭館(大正11年） 今井寅之助）	1922
						芸術・文化の胎動 （短歌・俳句）	
						スポーツへの傾倒 （苫小牧スケート協会設立）(大正14年）	1925
						当時の歌謡曲に歌われた地域性	
				第5節	教育施設の整備	苫小牧東尋常小学校開校	1918
						苫小牧町立女子実業補習学校開校(大正8年）廃校(大正11年）	1919-1922
						北海道苫小牧高等女学校開校 西高の前身(大正15年）	1926
						苫小牧工業学校開校(大正12年）	1923
				第6節	勇払原野の女たち	この時代の女性たち （苫小牧赤心会（佐伯タキ会長））	
						原小牧 苫小牧婦人技芸教授所（私塾）を設立(大正13年）	1924
						婦人技芸教授所が学校に昇格 苫小牧女子技芸学校に改称	1928
						浜の女たち （佐藤トワほか）	
						実業の女傑たち（砂川カメ 渡辺ツネ 吉村けい 不川キヌ）	
				第7節	村から町へ	市街地区画整理実施 （一条通りなど）(大正7年）	1918
						町制施行 苫小牧町に	1918
						町営電気オテーネ地区に送電開始	
						一級町村制実施(大正8年）	1919
						こいのぼり大火と市街地消失(大正10年）	1921
						市街地の東進 （大火後の移動）	1921
						新川通りの整備 （防火帯）	
						当時の村・町長たち	
				第8節	勇払河口と築港論	今井寅之助、私財を投げうっての漁港築港(大正7年）	1918
						林千秋、勇払築港論(築港への動きが加速)(大正13年）	1924
						発動汽船による勇払河口入港試み(大正13年）	1924
		第4章	激動の時代 昭和前期 1926-1948	第1節	昭和の幕開け	町名地番改正実施（十五町名設定）	1928
						町長たち（鈴木善治、飯田誠一）	
						人口は2万人を突破・厳しい財源確保	1930
						消防組に自動車ポンプ一台配備	1928
						消防組常備消防庁舎と望楼完成	1930
						大不漁が二年続く	1930
						勇払原野開発排水幹線掘削起工	1930
						漁港試験工事（昭和10年）	1935
						苫小牧中学校開校（昭和12年）	1937
						人力車・客馬車から自動車、雲雀ヶ丘飛行場	1927
				第2節	開戦へ 15年戦争	満州事変勃発	1931
						国防婦人会苫小牧分会	1932-1942
						苫小牧防護団設立	1934
						国家総動員法 （地元新聞は道内11紙が「道新」1紙に統制）	1938
						皇紀2600年事業 苫小牧町史	1940
						兵事係の仕事（出征兵士、戦没者、町葬）小野慶郎	
						大政翼賛会北海道支部設立 （戦意高揚）	1941
						町営電気事業を配電会社へ譲渡 運送事業も統制に	1942
						大日本再生製紙の創業 （水野成夫、南喜一、篠田弘作）	1943
				第3節	銃後の暮らし	戦時下の生活と教育 （聞き取りなど） （王子リンク 国体冬季）	
						青年学校・国民学校	1935
						教員、役場職員の出征と代用教員	
						戦時体制下での活動（苫高女のスケート部など）	1943
						疎開してきた文化人のもたらしたもの （川上澄生、浅野晃）	
				第4節	無差別攻撃と戦争の跡	北海道空襲（昭和20年7月14・15日）道内死者2916人（うち苫小牧12人）	1945
						攻撃を受けた漁船、駅舎、王子工場、再生製紙など	1945

目 次 大 綱

編目		章目		節目		各節目で想定する主な項目	西暦
						柏原に墜落した日本陸軍重爆撃機「飛竜」	1945
						樽前山ろくに墜落した米軍機の搭乗員ラスムッセンの記録	1945
						沼ノ端陸軍飛行場跡、戦闘機を格納する掩体壕（えんたいごう）施設、トーチカ 塹壕	
				第5節	敗戦と混乱	敗戦の混乱　戦後のソ連軍の侵攻	
						公文書類の焼却 （田中正太郎さん回顧）	1945
						婦人参政権（女性初の参政権が認められる）	1945
						公職追放-復活　八巻町長など	1946-1950
						千歳に進駐軍 GHQの接収（沼ノ端飛行場など）	1945
						深刻な食糧問題 （門脇松次郎・南喜一・王子資料）	
						駅前マーケットと朝市	
						樺太、満州から引揚げ（引揚者団体苫小牧支部　昭和21-45年解散まで）	1946-1970
		第5章	民主化から高度成長へ 昭和中期 1947-1963	第1節	市民の誕生	地方自治　民選　田中町長誕生	1947
						戦後開拓（東京開拓団　一野辺登の記録など）	1947
						戦後の人口増と市制施行	1948
						教育制度と新制中学校　弥生中ほか　男女共学	1948
						観光まつり～港まつり	1950
						一条通りと鶴丸百貨店開店　商店街	1952
				第2節	敗戦からの復興へ	朝鮮戦争勃発、冷戦開始　レッドパージ（共産党員解雇、道内1200人強）	1950
						国会議員の誕生（篠田弘作衆議院議員・西田信一参議院議員）に当選	1952・56
						市役所旭町へ移転	1952
						占領の終了（6年8か月）　サンフランシスコ講和条約発効	1952
						岩倉組ホモゲン第2工場稼働 （地元資本の展開）	1953
						住宅博覧会開催する　　西弥生住宅と住宅整備	1953
						大通りの拡幅と舗装工事（道路整備）	1956
						湿地帯の埋め立て開始	1960
				第3節	苫小牧港	室蘭開発建設部苫小牧出張所開設　道路、港湾	1951
						港湾建設の本格化 （港を軸にしたまちづくり計画）	1951
						苫小牧港開発株式会社設立（第三セクター）	1958
				第4節	女性の社会進出	苫小牧婦人会発足	1947
						洋裁ブーム　洋裁学校などの新設（技芸学校・小池文化学院・前嶋フク）	1948
						新興　岩倉組と女子スピードスケート部 （長野富子ほか）	1950
						スピードスケート世界選手権大会（スイス）で日本人初優勝　内藤晋	1951
						サークル活動と成人学校（市教委主催）	1951
						婦人団体運営促進協議会発足	1952
						ベビーブームへの対応（学校の新設など・若草小・北光・緑）	1952-58
						苫小牧女子高の開校	1961
				第5節	市を二分する争議	無期限スト、第二組合誕生	1958
						主婦連、家族たち	
						市民への影響	
		第6章	脱企業城下町に向けて 昭和後期 1963-1973	第1節	開港と社会移動	苫小牧港の港湾法による重要港湾指定（第一船入港　港湾企業）	1963
						産炭地からの移住の増加と受け皿・雇用促進住宅　沼の端、啓北、錦岡	1963
						大泉市長誕生 （港湾部　管理組合）	1963
						トマコマイビル開業（銀行　事務所とホテル）	1963
						新産業都市指定	1964
						関税法による開港指定(外国貿易港の指定)	1966
						漁港区整備と漁業補償	
				第2節	市街地の拡大・ 都市機能充実	鉄北の発展　　旧緑町の宅地化と住宅用地の確保	1964
						住吉町に公住建設　町名分割	1964
						春日町ほか王子不動産による社員向け、市民向けの土地分譲	
						十万都市にあわせたまちづくり　　都市改造事務所 （中心部）	1967-1973
						職住分離（糸井団地構想と着工）	1971
						錦岡新団地　　錦岡出張所	1964
						拡大する市街地 （上下水道）	
						市営バスの延伸とワンマンへの移行	1968
						医療機関の機能強化 （王子病院・市立病院）	
						和光中学校開校	1961
						駒沢大学付属高校・短期大学　開校	1964.65
						苫小牧工業高等専門学校の開校	1964
				第3節	企業誘致推進と成果	工業の再配置・工業用地の造成	
						苫小牧市の東京事務所開設	1967
						日軽金の進出決定と操業開始	1967-1969
						本州企業の進出と誘致（出光、ケミカル、清水鋼鉄、日之出化学など）	
						公害防止条例	1972
						物流機能の強化（工業港からの脱却）	
						カーフェリー航路の開設	1972
						オイルショック	1973
				第4節	市民生活の多様化	娯楽遊興施設の増加 （パチンコ・映画・ビリヤード・ボーリング・TBS樽前）	
						スケートまつり・しばれ焼き（昭和42年-）	1967
						スポーツ都市宣言（スポーツ施設の充実 （スケート・野球・屋内プール））	1966
						苫教組誕生（北教組から分かれる）	1966
						美園小学校開校（遠藤満男校長）とPTAの文化活動(七香窓)	1968
						苫小牧市婦人ホーム（働く婦人の家）道内初の開設（全国16番目）	1968-1994
						公共施設の充実(市民会館・図書館・科学センターなど)	
						植苗・樽前に社会福祉法人施設	1970
						人間環境都市	1973
						苫小牧百年事業 （八王子市と姉妹都市に）	1973
		第7章	新たな開発計画 1970-1987	第1節	苫東開発の光と影	東部地区用地の買収と住民の移転	1970
						第2工業港築設に反対する漁民大会・苫東計画反対運動	1970
						漁業補償と漁民団地造成	1975
						栽培漁業への取り組み（ほっきほか）	
						土地バブル（不動産業・ホテル・観光業のつかの間の繁栄）反対運動	
						名門　岩倉組アイスホッケー部廃部	1979
						開発（苫東、ゴルフ場、道路など）による遺跡の急増	
						いすず自動車工場・三協精機操業	1984
				第2節	東港建設と公共事業	姉妹都市交流の活発化（ネーピア1980　日光1982）	1980
						大泉市長の退任と民間出身板谷市長の誕生（市役所新庁舎完成）	1983
						日高高規格道路	
						東港整備・苫東火発	
						国家備蓄オイルイン	1984
						大洗航路開設認可（　室蘭との競合　）	1984

目 次 大 綱

編目		章目		節目		各節目で想定する主な項目	西暦
						市企業誘致振興条例	1985
				第3節	開発と保護	自然保護、文化財保護の機運	
						アオサギコロニー	
						ウトナイ湖、野鳥の会による日本初のバードサンクチュアリに指定	1981
						折居彪二郎が終の棲家とした植苗地区の鳥獣保護区、特別保護区	1982
						ウトナイ周辺を港開発が富士館から買収する・乱開発防止	1983
				第4節	商業地図の書換え 大手資本の参入 駅前再開発	都市再開発の推進（サンプラザ、サンルート、トピア）	
						朝市の解散	1973
						駅周辺大型店の進出（長崎屋1973、ダイエー1977、ヨーカドー1978）	1973-
						一条通りの地盤沈下 （中心商店街消滅の予兆）	
						コンビニ市内一号店（セイコーマート啓北）	1979
						苫小牧駅完成・エスタで物販・南北自由通路	1982
				第5節	女性たちの輝き	女性市議誕生	1971
						苫小牧市婦人団体連絡協議会の発足（翌年、交通安全母の会を結成1973）	1972
						日本女性マナスル登山隊の一員として登頂に成功する 森美枝子	1974
						文化振興基金新設	1978
						駒沢高校女子スピードスケート部黄金時代に	1983
						女子アイスホッケー選手権 苫小牧ペリグリン初優勝	1985
						砂沢クラ 苫小牧移住と自伝 1983刊行	1978
						専門職の女性たち （矢嶋浪江 関寺美起恵 など）	
						男女雇用機会均等法	1985
						女性史「勇払原野の女たち」刊行	1992
		第8章	工業と物流のまちに 昭和から平成 1987-2002	第1節	広域圏の中心都市へ	鳥越市長の誕生 （40代 共稼ぎ夫婦）	1987
						千歳川放水路問題と自然保護	1988
						道央テクノポリスの地域指定	1989
						大学誘致と、苫小牧駒沢大学開校	1992
						人口17万人に	1995
						苫東開発の破たんと方向転換	1998
						非核平和都市（全道初の条例制定）	2002
				第2節	陸・海・空の物流	国鉄からJRへ （鉄道輸送の衰退と駅前の空洞化）	1987
						都市間高速バス運行	
						陸上物流に活路（明野地区物流基地）	
						フェリー航路の統合と新航路の設置（海上輸送）	1972
						石炭積み出しの終了・石炭ふ頭の廃止	
						新千歳空港の24時間運用への対応	1994
				第3節	自動車産業の集積 職住近接	トヨタ自動車北海道設立と関連企業の増加	1991
						明野地域の人口増と新興住宅地、学校新設「苫小牧総合経済高校」	1990
						沼の端地区の変貌と勇払地区（沼ノ端からの通勤増）	
						都市の森づくり（大学演習林）・森の集い	
						錦大沼公園とアルテン	1990
						ファンタジードーム開業（1997閉園）	1990
						美沢にノーザンホースパークオープン	1989
				第4節	アイヌ新法成立と展開	アイヌ新法成立（北海道旧土人法改め）	1989
						福祉課にウタリ相談員配置	1992
						ウタリ協会支部（76）年と生活館	1990
						アイヌ文化振興法の成立	1990
						史跡を活用する地域づくり（勇武津資料館の名称問題）	1996
						千人同心200年（悠久二百年）	2000
				第5節	女性たちのひらく世界	リレハンメルで山本宏美が銅メダル	1994
						女性市議会議員複数となる・国政ではマドンナ旋風	1987
						女性初の副議長	1997
						子ども本の会活動に文化奨励賞	1999
						女性消防団発足	1999
						女性みなと街づくり苫小牧設立 大西育子代表	2003
		第9章	低成長時代に 2003-2019	第1節	官から民へ	桜井市長の誕生（少数与党での混乱と突然の幕切れ）	2003-2006
						岩倉市長の誕生	2006
						市から民間への移譲 （市営バス民営化）	2011
						指定管理者制度導入 （図書館など公共施設60か所：2019現在）	
						サイクリングターミナル(2000年自転車道路協会から市へ譲渡)	1984-2015
						男女共同参画都市宣言（道内初）	2013
						拓勇地区の都市計画・空港周辺補助金の利用	
						ウトナイ湖ユースホステルの閉館（公営では道内最古45年の歴史）	2005
						「道の駅ウトナイ湖」開業	2009
				第2節	中心部の空洞化	中心地区の人口減少（社宅の消滅）	
						市立病院の移転新築（本幸町から清水町へ）	2,003
						駅前・一条通り商店街衰退と映画館廃止（「セントラル映劇」、「苫小牧日劇」）	2005
						中心大型店（鶴丸・ﾀﾞｲｴｰ・丸井）の閉店2005・ ヨーカドー2010	2005-2010
						地元資本の弱体化（老舗の廃業 旅館からビジネスホテル）	
						ミートホープ食肉偽装事件	2007
				第3節	市民の誇り	駒大苫小牧高の全国制覇 二連覇 準優勝	2004-2006
						オリンピックとメダリストたち （バンクーバー団体、北京佐藤 リオ丹羽）	
						演劇鑑賞会の解散	2015
						企業スポーツの衰退（野球・スケート）	
				第4節	東部への更なる集積	郊外への商業モールの形成（商店街に代わるもの）	
						東への移転（ユニクロ、ケーズ電気、ニトリ2011、家具長谷川など）	
						新開へのコメリ（土地売却にからめて）・トライアル	
				第5節	震災経験とこれから	東日本大震災	2011
						胆振大地震と再生エネルギー	2018
						中心市街地 公住建設 活性の火2014 新しい動き	2014
						丸井跡地利用・ココトマ(まちなか交流センター） 弥生中跡地	2014
						市民高齢化と高齢者施設の増加・介護制度	
						女性 日本女性会議の開催	
						少子化と学校の縮小・苫小牧駒澤大学の譲渡	2017
						近代化遺産 王子製紙関連施設・土木遺産としての苫小牧港	2018
						アイヌ新法案「先住民族と位置づけ」の成立	2019
						持続可能社会への取り組みと人口増への課題（IR誘致など）	
	索引						
	編集後記						